



銀河ホールから 何を学ぶか

全日本リアリズム演劇会議議長
実行委員長 山本 浩二

湯田というところへ一度行ってみたい
とずっと思っていました。四十年前の二
十代から。いうまでもなく川村光夫さ
んが居られ、川村さん率いるぶどう座
があったからです。ところが私も劇団
があるのでなかなかシーズンになると
それどころでなく、気がいたら二年過
ぎているという繰り返しで四十年来て
しまったのです。地方劇団といえぶど
う座でした。とくにレッドパージによ
って職場劇団が吹き飛ばされてからは、
地域に拠点を持つ以外活動ができな
くなり、ぶどう座の存在が大きくクロ
ズアップされて来たのです。地方劇団と
いえぶどう座、ぶどう座といえば川
村光夫、それを知らないものはもぐり
だったといつていいでしょう。

しかし、高度成長で若者が大都市へ
と集中、湯田町が過疎に苦しめられる
や、当然ぶどう座はそのあおりを受け
ぬわけがありません。何しろ二万三千
人の町が、なんと四千百五十人の過疎

の山村になってしまったからです。ぶど
う座の苦しみを耳にするようになり
ました。それを跳ね飛ばしたのが銀河
ホールの建設ではないかと私は思うの
です。もちろん人口四千の過疎の町に
岩手国民文化祭を機会に銀河ホール
を作り、演劇祭を湯田で開催されたの
もぶどう座の活躍があったからに他な
りません。

そんな人口四千の湯田町という山村
に立派な文化ホールを作って使いこな
すことができるかと思うのは誰しもう
ですが、それが立派に生きたホールとな
るから不思議です。

この数年各地に立派なホールが生ま
れました。こんな田舎と思うところに
デーンとお城の如く聳え建っているの
です。これを見ると日本も文化国家とな
うと思えますが、その多くが活用でき
ずねずみが行っているのです。しかし、
ここ銀河ホールは人間が走っています。
生き生きと走っています。

今回のフェスティバルにブレ企画とい
うのが初日にあります。宮沢賢治原
作「土神裁判」「植物医師」とありま
す。前者は平成十二年度銀河ホール演
劇講座受講生による上演とあり、後
者は湯田町、北上市、沢内村、山内村
の六十五歳以上の高齢者による上演
となっています。いや、楽しみです。私は
無理してでもこれを見せてもらおうつも
りです。

この演劇講座受講生というのが銀
河ホールを町民のホールにした鍵だと
思うのです。利賀村の利賀山房はどん
なホールか知らないが、そこで開かれる
国際演劇祭利賀フェスティバルがどん
に華やかにマスコミをにぎわしても、利
賀村の村民とは全く無縁のものだった
のです。あるとしたら全国から集まる
観客の落とすお金だけ。演劇祭の期間
が過ぎたら村民にとっては全く無用の
長物です。これは何も利賀山房でなく
ても各地の文化ホールの自主企画もい
ろいろ試みられているが、なかなか住民
のものになつて行かないのです。

どんな立派な文化ホールができても
問題は中身です。中身が文化ですから。
当然のことですが、その当然に挑戦し
たのが、銀河ホールの室長、室長という

存在でなく、新田満さんの場合演劇会
議に書いたとおり、立派なアートマネー
ジャーというか、活動家というか、雑用
家というか、不思議な存在です。それ
を支えたのが菅原町長さんです。

文化ホールの館長の多くが次への腰
掛けか、いや定年前の閑職。とんでもな
い、文化ホールはその町の顔、都市の顔
です。その顔にするための情熱のない
人では文化ホールを生かすことができ
るはずがありません。過疎なら過疎、
都市近郊なら近郊、田園都市なら田
園都市、それなりにその地域の文化的
な顔を作らねば文化ホールという箱を
作った意味はありません。文化行政職
は腰掛けでなく、今日の先端を行く専
門職でなければならぬのはそのため
です。新田さんは菅原町長さんの後押
しで先端を行く専門職になったのです。

後は、ここ銀河ホールで勉強してく
ださい。その銀河ホールに韓国の劇団
が来るのです。これも湯田町にとって開
關以来の出来事です。やる条件を作れ
ば国際文化交流は全国のどこでもでき
るので。国際文化交流の二十一世紀は
とうとう来たのです。
その意義を学びましょう。